

Udai 教育セミナーレポート

フォト・ランゲージ～もっと写真を活用する～

話題提供者: 湯本 浩之 (宇都宮大学 留学生・国際交流センター・准教授)

日時・場所 平成27年6月18日(水) 16:30～17:30

峰町5号館ラーニングコモンズ4 参加対象 本学教職員、学生

✦ Udai 教育セミナー開催の趣旨

宇都宮大学は、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されました。新たな地域社会の変革を担うべく主体的に挑戦し(Challenge)、自らを変え(Change)、社会に貢献(Contribution)する人材を養成するために、従来の学力に加えて「行動的知性」の伸長を図ることを目指しています。

本学の多様な授業実践の成果と課題を共有することを目的に、Udai 教育セミナーを定期的開催しています。第2回は、写真を活用した手法・教材の総称であり、参加型学習の基本アクティビティのひとつである「フォトランゲージ」を取り入れた授業実践「ワークショップで学ぶ「変わりゆく現代社会の中の私たち」(アクティブ・ラーニング科目)について、留学生・国際交流センター・准教授の湯本浩之先生に紹介して頂きました。

✦ まずは、体験

「フォトランゲージ」について紹介するにあたり、体験した方が分かりやすいということで、参加者を2グループに分けて、写真の情報を読み解くワークを行いました。5～6人で、ひとつの机を囲み、写真(A3の用紙にコピーしたもの)を見ながら、ファシリテーター(湯本先生)が問いかけた内容について考えるというもので

した。使用された写真は3枚で、次のような特徴がありました。

- ①撮影されているのは外国である(どこの国・地域であるのかは分からない)。
- ②それぞれの写真に、家族と思われる人々が記録されている(それぞれ人数や雰囲気は大きく異なる)
- ③生活の様子を思わせる物(調理道具や家具、自転車など)が写真内にちりばめられている。

写真を1枚ずつ渡しながらか、「この人たちはどのような関係なのか?」、「どのような家族なのか?」、「父親、母親は、それぞれどのようなことを思っているのか?」という問いかけがなされ、それについてグループ構成員で意見を出し合いました。アフリカで撮影されたと思われる写真を机において、「大家族なのでは」、「一夫多妻制なのでは」など、写真のなかにある情報をもとに予想し合いました。



次に、東南アジアで撮影されたと思われる写真、ヨーロッパのどこかで撮影された写真を加え、アフリカの写真と比較しながら、家族のあり方や生活環境の違いについて考えました。アフリカで撮影された家族は必要最低限の貧しい生活をしており、東南アジアで撮影された家族は、ゲーム機の存在からやや裕福で、ヨーロッパで撮影された家族は、庭に溢れかえる家具から最も裕福であるというように、家族の経済状況の違いを推測できるようになっていました。

✦ 特に工夫されていた点

この3家族の写真をみながら、「一週間ホームステイをするならどの家族がいいか？」という問いについて考えた後、「生まれ変わったらどの家族のところに生まれ変わりたいか？」「もっとも豊かなのはどの家族だと思うか？」と問いかけることで、3家族の居住地の経済状況や生活環境を、他人事ではなく自分の問題として捉え直すことができるように配慮されていました。グループ構成員の大部分が、ホームステイをする場合と生まれ変わる場合で、選択する写真が変わっていました。実際に「フォトランゲージ」を体験することで、以下のようなことを学生が考えるきっかけになっているのではないかと感じました。

- ①「豊かさ」や「幸せ」の基準は、グループ構成員のなかでも違いがあること。
- ②何を基準にするのかにより、「豊かさ」や「幸せ」の意味が変わること。
- ③個々が無意識に持っている、他国や他者に対する見方、自国中心の価値観の存在。

実際に体験をしたあとに、湯本先生より「フォトランゲージ」の解説がなされました。視聴覚教材を使った授業自体は一般的に行われていますが、多くの場合、スライドに写真等をうつして、それを教員が解説するという「伝達型」が採られる傾向があります。それに対して、「フォトランゲージ」には、以下のような特徴があることが説明されました(以下は、報告者による要約)。

- ①写真に含まれている情報を学習者自身が読解していく「参加型」である。
- ②教員は、解説者ではなく、議論・対話を促進する「ファシリテーター」である。
- ③使用する写真は、情報量が多く、「多様な解釈」ができるものが適している。

視聴覚教材を伝達的に使うことを否定するのではなく、それぞれの手法のメリット/デメリットを理解し、いかに相互補完的に活用するのが大切であると強調されました。グループ構成員は、初対面の人もおり、院生も含めて所属が多岐に渡っていましたが、共通する素材(写真)を囲むことで、ファシリテーターを介さなくても話し合いがスムーズに進んだという感触が確かにありました。



そこからも、学習者が相互に対話し協働するきっかけとして、「フォトランゲージ」が一定の役割を果たし得ることを実感することができました。

✦ 質疑応答(抜粋)

ポイント1：写真のメディア的特性をどのように伝えるべきであるか？

参加者から出た質問のひとつが、古い写真を扱う場合、写真に組み込まれている時代性(当時の価値観など)を、あらかじめ学生にどの程度、どのように伝える必要があるのかというものです。

写真には、その時期の「人種観」や「ヒエラルキー」が映し出されることが多々あり、それについてはある

程度の時間をかけて説明する必要があるが、情報を出しすぎると学生の自由な発想が出にくくなる気がするという発言がありました。

この指摘に対して、撮影者の意識／写真が放つメッセージ／受け手の視線は必ずしも一致するとは限らないため、3つの視点があるということを写真の見方として学生に伝えておく必要があることを、ピュリッツァー賞を受賞した写真を事例に解説して頂きました。

ポイント2： 教員は導入部分でどこまで方向性を示すべきであるか？

「フォトランゲージ」は、学生に多様な見方を促すために有効であるが、明確な答えがないと学生は不満を感じる傾向もあるため、導入部分で教員の意図をどの程度匂わせればいいのか、さじ加減についてどうすればいいのかという質問が出ました。

その点について、授業の計画を立てるときに、個々の授業をどのように接続させるのか、講義をどのタイミングで入れるのかなど、15回を全体として構想する必要があるという回答を頂きました。

参加者からも、「振り返り」を含めると最低でもひとつのテーマで2コマ必要である、学生自身に考えてもらいたいが沈黙に耐えられず解説してしまう、考える時間を想定してゆとりある授業内容にする必要があるなど、授業実践の経験を踏まえた意見が出されました。

ポイント3： 学生に備わる「力」とその評価方法についての意見交換

加えて議論されたのが、「フォトランゲージ」を通じて学生にどのような「力」が備わるのか、学生の参加度をどのような尺度で評価するのかという点です。

学生に期待する「力」については、大きく変わることを早急に望むのではなく、疑問を持つ、前向きなアクションをする、人と協力することの大切さを知る、自信を持つなど、基本的な姿勢を備える機会にしてもらいたいとのことです。評価方法に関しては、発言していれば積極的であるとは限らず、発言していなくても考えている場合があるので、過度に管理的になるのは良くないと思い、提出物を含めて総合的に判断しているという回答を頂きました。

回答に対して、参加者からは、基本的な姿勢を備えることは、大学の「入口」として大切であるが、1年生のうちに備えておいて欲しい力であり、3年生、4年生で備えるのでは遅すぎるため、大学の「どこ」に「どのような」授業があるのかを把握し、適切に配置していく必要があると感じたという声を頂きました。

※使用教材

ピーター・メンツェル写真、ERIC 国際理解教育センター編『地球家族: フォトランゲージ版』(ERIC 国際理解教育センター、1995年)

(報告: 長谷川 詩織)